



TITLE:

ボンネットザルの社会構造の研究 (Ⅲ 共同利用研究 2 研究成果)

AUTHOR(S):

杉山, 幸丸

CITATION:

杉山, 幸丸. ボンネットザルの社会構造の研究(Ⅲ 共同利用研究 2 研究成果). 霊長類研究所年報 1971, 1: 52-52

ISSUE DATE:

1971-09-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160459>

RIGHT:

“ボンネットザルの社会構造の研究”

杉 山 幸 丸 (京大・理・自然人類*)

1961年から2年間にわたる南インド・マイソール州・ダルワール生息の、ボンネットザルの自然群の社会構造の調査の結果について、当時の共同研究者たちと会し、討論した。(共同利用研究費は、討論のための旅費に充てられた。)

ボンネットザルはインド南半分に生息するマカカ属の一種で、その社会構造はマカカ共通の統一のとれた複雄群の基盤の上ののっているが、行動のパターンは複雑多様で、個体間の社会関係は高い許容度を示す。すなわち、日常生活では、ニホンザルに比べると、厳格な社会秩序が表面に出ず、行動にあらわされないにもかかわらず、クリティカルな時点では、ニホンザルに匹敵する群れの高い統合度を発揮する。このようなボンネットザルの行動と社会の特徴は、この種の高い個性に裏うちされたものであらうと考えられる。

なお、この研究の結果は下記の報告にまとめられた。

Sugiyama, Y. (1971) Characteristics of the social life of bonnet macaques (*Macaca radiata*). *Primates*, 12(3): (in press).

* 1970年9月より、豊長研

霊長類の弁別学習における興奮過程と抑制過程**

—auto-shaping の手続の検討—

小 川 隆 (慶大・心理)

河 嶋 孝 (慶大・心理)

浅 野 俊 夫 (豊長研)

** 「ニホンザルの2種反応強化事象における auto-shaping」 日本心理学会第34回大会 (1970)

「ニホンザルのレバーひき訓練における superstitious behavior」 第14回プリマテス研究会 (1970)

ニホンザル用スキナー箱を用い、レバーひき反応を測定とし、円形パネルに呈示される視覚刺激を弁別刺激とするオペラント弁別及びレスポデント分化における興奮過程と抑制過程の様相を検討することを研究の目的としたが、実験はまず、レバーひき反応をニホンザルに形成せしめる手続の検討から始められた。従来、スキナー箱でオペラント反応を形成させる手続としてはいわゆる接近法(または hand-shaping)を用いるのが通例であるが、最近、auto-shaping と呼ばれる手続もまた、オペラント反応の形成に有効である事実が知られてきており (e.g., Brown & Jenkins, 1968), 本実験では

auto-shaping の手続を採用してレバーひき反応を能率よく形成せしめるべく種々の変形を試みた。

被験体: 実験経験のないニホンザル8頭 (adult, ♂, 平均体重10.2kg) を用いた。

装置: 70×70×70cmのニホンザル用スキナー箱を用いた(詳細は浅野, 1970 参照)。壁面は灰色に塗装された鉄板で、床は格子となり、天井は金網で20-Wの蛍光灯を置き室内灯とした。一方の壁面に縦35cm横25cm奥行15cmのくぼみが設けられ、その壁のサルのほぼ眼の高さに直径7cmの白色プラスチック板のパネルがあり、外部からプロジェクターにより白色の光刺激が呈示された。そのくぼみの底部の中央に長さ約10cmの金属製レバーあり、出入可能とした。強化子は大豆で、1強化として1粒を与えた。餌皿はレバー背後に置いた。実験は logic module (Grason-Stadler 社製及びユニテック社製) により制御され、反応は on-off 記録器及び電磁カウンターに記録された。

手続: 第1日は magazine 訓練, 第2日以後本訓練に入った。各条件の手続は図1に、被験体の配置は表1に示す。条件4, 5はレバーひき反応が形成された後に行なわれた。(S-2及びS-9では接近法が用いられた。)

1 session は60試行, 1日に2 sessions, session間の間隔は15分とした。auto-shaping の手続では被験体の反応の有無にかかわらず各試行で強化が与えられるので、1日の強化数は120であった。

結果及び考察: 条件1はパネル押し及びレバーひきのいずれの反応も強化をうける手続であるが、結果からは、いずれの反応も出現しうること、またパネルに白色光が呈示されている期間中にはレバーひき反応がより優勢に生ずることが知られよう(表2)。

条件2は条件1と同じく白色光と同期してレバーが出入するが、条件3ではレバーは常時呈示されている。いずれの場合にもパネル押し反応は強化されない(条件4, 5も同様)。結果は図2に示す如くであり、レバーひき反応を形成させるためには条件2がより有利であるといえよう。

条件4の結果は表3に、条件5の結果は表4に示す。レバーひき反応が形成された後も auto-shaping の手続が継続される条件4の場合には、レバーひき反応以外の反応、すなわちパネル押し反応の出現が顕著であるのに対し、その手続を続けない条件5の場合にはそのような反応は生じないことがみられた。なお、条件4及び5の場合には、パネルに白色光が呈示されない時期にもレバーを出し、その場合のレバーひき反応には強化を与えないという明暗弁別の場面を設定したが、反応の分化は生じなかったために、結果には点灯期及び消灯期の反応